

東京都高校総体を終えて

陸上競技専門部強化委員長 小林 隆雄

平成23年5月8日(日)大井競技場においてハンマー投げの決勝を皮切りに本大会が開催された。5月14日(土)からは今年よりブルータータンに新装された駒沢競技場で競技が行われた。その結果、3つの東京都高校新記録と8つの大会記録が樹立されるという充実した結果を得られた大会となった。3月11日の震災以来、春休みを中心に部活動の自粛や競技会の中止など、選手・顧問の先生方は調整に苦慮されたことと思うが、それを跳ね除けるに余りある好成績といえるのではないだろうか？被災地でもある岩手県北上市での「北東北総体」にむけ、「チーム東京」の活躍を期待し、本大会の感想を述べたい。

感想

- ・大会前は、もう少し多くの大会記録等の好記録が樹立されるのではないかと予想していたくらい「充実した戦力」と感じていたが、風などのコンディションの影響で思いのほか良い記録が出されることがなく、やや残念な感が残った。しかし、昨年新人大会からはかなり競技力が向上したと感じた。
- ・駒沢競技場の新しい走路は、硬さが増し反発が強くなりスプリント種目に好影響をもたらしたと感じた。ただし、トラック種目には4日間とも強い向い風が吹き、記録への期待が削がれた感があった。
- ・例年に比べ非常に内容の濃い都総体であったと感じた。どの種目にも全国入賞候補(優勝候補)がおり、関東大会・インターハイ等での活躍が期待できる。種目によっては複数の人材が活躍しそうなものもあり非常に楽しみである。

今後に向けて

- ・関東大会はレベルが高く、万全で臨まなければ結果は得られないが、強化としての目標でもある「千葉県・神奈川県を上回るインターハイ出場数」にむけて積極的に活動をしていきたい。
- ・インターハイでの入賞数を過去最高に導けるよう、練習会場の確保などに努めたい。
- ・また、2年後の「東京国体」にむけて今大会は1年生の活躍が目をつけた。それらの選手たちをしっかりと育成していきたい。

東京都高校総体 観戦記

5月8日(日) 大会初日 晴天 微風

会場の関係から、本大会に先がけハンマー投げの決勝が大井競技場で行われた。昨年は全国レベルの60mを超えた選手が3名も出るという盛況を極めたこの種目だが、今年はややレベルを落とした。しかし、その中で優勝した若月 優士(都北多摩3)は終始スピードあるターンから50mを超える試技を見せた。5投目には優勝記録56m26をマークした。この記録はインターハイで決勝に残ることができ、現時点では全国トップ10に入ることのできる記録でもある。今後、彼の武器であるスピードがフィニッシュにまでコンスタントに繋がることできれば全国入賞の可能性は広がるだけに期待したい。

5月14日(土)大会2日目 晴天 強風

この日の終盤、男女の4×100mリレー予選において大記録が樹立された。共に東京高校チームが大会記録を上回る好記録を打ち立てた。先に行われた女子は、従来の47秒36の大会記録を大きく更新する46秒71を高森一片桐一峰一藤森のオーダーでマークした。この記録は東京高校が一昨年マークした46秒56の東京都高校記録まであとわずかに迫り、昨年の全国高校ランキング4位に相当するものであった。男子はこれまでの東京都高校記録40秒63を上回る40秒59という大記録を加藤一ケンブリッジ一猶木一女部田のオーダーで樹立した。この記録は昨年度の全国高校ランキング1位・全国歴代24位に相当する立派な記録である。男女ともインターハイの優勝候補NO1に名乗りを上げる好記録であり、今後更に記録を更新されることに期待したい。

また、男女の400mでは予選がタイムレースであることもあり予選から好タイムが続出した。男子では予選から48秒台が続出するハイレベルであった。決勝では、松本 健志(中大附3)が48秒23と大幅な自己新記録で優勝したが、3位までが48秒台を記録しインターハイが楽しみになった。また、女子においては6位入賞者全員が2年生であり、7位までが58秒台とこちらも昨年の新人大会から大幅にレベルアップしたといえるし、次年度への期待も高まる。優勝した安西 この実(白梅学園2)はラストの直線の強い向かい風の中で57秒17をマーク。コンディション次第では55秒台が期待できる。

男子1500mでは、やはり打越 雄允(久我山2)が格の違いを見せた。大会新記録こそ逃したが強風の中での3分54秒94は立派である。5位までが4分を切り実力のある者が関東に駒を進めた。

男子棒高跳では、今年新加盟の日本ウエルネスの船本 稜矢(3)が4m50で制した。身体能力の高さが伺われ、卓越した技術を身につけているので関東大会で実力を発揮できれば上位入賞は確実であろう。また、昨年の新人大会では2名しか出場していないこの種目で、今回11名が参加した。この内7名が1年生であり今後盛況となるよう期待したい。

男子走幅跳では、支部予選で唯一7mを跳んでいた佐藤 耕太(都片倉3)がやはり本大会でもただ一人7mを超え優勝した。安定した踏切からコンスタントな記録を連発していたことから関東大会での跳躍にも期待したい。また、2人の1年生が入賞しておりこちらもこれからが楽しみである。

女子の競歩は、今年から5000mに距離が延びた。その中で昨年関東に出場した味波 舞(八王子3)が終始独歩で初代チャンピオンに輝いた。しかし、29分台ではインターハイ出場は厳しいのでこれからの精進に期待したい。

女子の走高跳では、期待の新人伊藤 明子(田園調布学園1)が1m64で優勝した。潜在能力が高くこれから非常に楽しみな選手の登場である。また、この種目も入賞者全員が1・2年生であった。これから切磋琢磨し1m70を超えるジャンパーが育つことを期待したい。

女子やり投げでは、実力者の3名が40mを超えるバトルを繰り広げた。優勝した小山 夏帆(拓大一3)は自己新記録の42m51を終盤に投げ再逆転した。さすがに昨年インターハイ出場の貫録を示した。2位の記田 良恵(都武蔵野北3)は41m58で一時はトップを奪ったが逆転を許した。3位の和田 茜(東海大菅生3)も40m72をマークし力ある者が上位を占めた。

5月15日(日) 大会3日目 晴天 強風

男子100mでは、決勝で向い風4.8mのなか第一人者のケンブリッジ飛鳥(東京3)が11秒06でゴールを真っ先に駆け抜けた。40mあたりでトップスピードに乗ると速度を落とすことなくゴールまで維持することができるのは強みであろう。強風でなければどのくらいのタイムが出たのかが知りたいところであった。

男子3000mscでは高木 登志夫(都南多摩3)がただ一人9分30秒を切り優勝した。終始先頭を譲らず、ハードリングも安定していて関東大会でもいかなるレース展開にも対応できそうであった。5・6位には学校

は違えど双子の木津兄弟が揃って関東進出を決めた。

男子400mHは、前日の400mで優勝した松本 健志(中大附3)が52秒87の大会新記録で優勝した。持ち前のスピードと無駄のないハードリングで他を寄せ付けず圧勝した。やはり、400m48秒台前半の走力は最大の武器である。2位の須貝 充(東京実業3)も54秒09と大幅に自己記録を短縮しインターハイも見えてきた。優勝候補であった田辺 将大良(東京2)は4月のケガが治りきらず欠場した。

男子5000m競歩は、予想通り東京実業の3名が上位を独占した。優勝した星谷 建の優勝記録は21分40秒36、2位の洪 肇佑も21分43秒04と大幅に自己記録を更新する好レースを繰り広げた。この記録は昨年度の全国ランキング14位相当であり全国大会でも入賞が可能なハイレベルなものである。一躍全国トップクラスにまで成長し、関東大会以上での活躍が大いに期待できる。また、東京都高校記録も見えてきた。

男子400mリレーは、予選と同様東京高校が圧勝したが、強風のため1秒近く予選からタイムを落とし41秒51とした。2位保善・2位岩倉・4位八王子あたりにもインターハイ出場の可能性が高まった。

男子砲丸投げでは期待通り大会新記録が誕生した。決勝の最終投擲である6投目に16m07を鈴木 愛勇(東京3)がマークした。鈴木本来の投擲が最後に「やっと出た」という感じだが、都高校記録の更新もそう遠くないだろう。2位には同じ東京の大山 優汰が15m51の全国レベルの記録をマークした。

男子八種競技では、中嶋 健人(立教池袋3)が4845点にまとめて優勝した。6種目目の得意のやり投げで56m14をマークし、この種目の2位に10m以上の差をつけてアドバンテージを作り、最後の1500mを懸命に走りトップでゴールして優勝を飾った。しかし、5000点が全国圏内となるだけにスプリント種目の強化が急務であるだろう。

女子100mでは、藤森 安奈(東京2)が危なげなく優勝したが、向い風3.9mは華奢な藤森には大きな壁となり好記録誕生を阻んだ。2位には準決勝3着で100分の1差のプラスで決勝に進んだ峰 悠花(東京3)が力強い走りで藤森に続いた。

女子1500mでは、やはり優勝候補の鈴木 翔子(白梅学園3)が他を大きく引き離し4分30秒88の独走でゴールした。強風により記録更新はかなわなかったが、安定した重心の位置からの伸びやかな走りは健在で、全国大会が楽しみである。また、ルーキーのト部 蘭(白梅学園1)は故障上がりからか終盤失速したものの6位に食い込み関東に望みを繋げた。

女子400mHは、昨年の新人大大会に続き岩本 香奈(東京3)が2位に2秒以上の差をつけ、1分03秒99で優勝した。強風の中でのこの記録は評価に値する。関東大会でも大きな走りを見せてほしい。

女子400mリレーは男子同様強風に阻まれたのか、予選よりタイムを落としたものの47秒00の大会新記録で東京高校が優勝した。全国でも優勝が狙えるだけに今後の記録短縮が楽しみである。

女子走幅跳びでは、加藤 咲希(明中八王子3)が1回目に5m55を跳び、以後もコンスタントに5m50以上を跳躍し優位に試合を進めた。最後の6回目にはスピードある助走から5m72をマークし優勝に花を添えた。強い追い風で助走をあわせるのが難しいコンディションの中、安定した跳躍を続けられた能力の高さは評価に値する。また、期待の新人利藤 野乃花(白梅学園1)が5m54で2位に入った。

女子円盤投げでは、2年生の武末 優(東京2)が1投目からリードし、一度も首位を譲ることなく34m89で優勝を決めた。この種目の成長が著しくコンディション次第では40mに迫ることもできそうであり期待がもたれる。昨年の新人大大会優勝の菊池 絵里菜(東京3)が33m97で武末と共に1・2位を占めた。

5月21日(土) 大会4日目 晴天 強風

この日は、トラック種目は全て予選のみの日程で、決勝種目はフィールド競技3種目のみであった。また、女子の七種競技が始まった。

トラック種目では、男子800m予選で好記録が続出した。タイムレースであったためだろうか2組目から1分56秒台がたたき出され、以後の組から積極的に記録を狙ったレースが展開された。結果的には、決勝に進めた8番目の記録が1分56秒台とこれまでにないハイレベルの予選となり、決勝に期待がもたれた。

決勝種目の男子走高跳では、優勝候補の小林 亮(八王子3)がただ一人2m03に挑戦したが、クリアすることができず1m99の優勝記録にとどまった。予選通過記録の1m83を超えた者が24名もおり多数での決勝となった。実力的にはあと数名が2m以上に挑戦できるのではないかと予想していただけにやや残念な結果であった。関東大会での奮起に期待したい。

男子やり投げでも優勝候補の勝田 悠平(日体荏原3)が他を寄せ付けず優勝した。優勝記録は58m66であったが、60mを超えてもおかしくない投擲が何本かあっただけに惜しい感がある。予選では好記録をマークする選手が多かったが、決勝ではやはり実力のある者が力を発揮し入賞した。その中で、1年生の栗城 湧介(東京)が6位に入賞したが、高校入学から始めたこの種目で1年生が入賞するのは大変稀であり今後期待したい。

女子砲丸投げでは、スーパールーキーの長沼 瞳(郁文館)が11m82で優勝した。長沼は中学生の昨年全国中学で優勝し、日本記録保持者でもある故 森 千夏選手の持つ東京都中学記録を更新した逸材である。まだ4kgの砲丸には筋力的には対応できていないが将来楽しみな選手である。また、ベスト8に4人の1年生が入り、6位入賞記録も昨年の新人大会9m台から一気に10m50以上に跳ね上がった。

5月22日(日) 大会最終日 晴→曇り→嵐のような雨風

最終日を迎えたこの日は、天気予報通り目まぐるしく天候が変化する1日であった。

そんな中、男子円盤投で2つの東京都高校新記録・大会記録が、男子110mHで大会新記録が誕生する盛況を極めた。

男子110mHでは、昨年沖縄インターハイ7位の高畠 匠(東京3)が向い風2.8mのなか14秒71の大会新記録を樹立した。この強い向い風の中、4人の選手が14秒台をマークするという素晴らしい結果であった。このまま、全国大会での活躍を期待したい。

男子200mでは、100m同様ケンブリッジ飛鳥(東京3)が21秒44の自己ベストで貫録の優勝をおさめた。まだまだ余力を残しての走りは今後に残しているようであった。また、2位の猶木 雅文(東京3)も21秒57の大幅自己新記録であり、3位・4位には保善の小林・金戸が21秒台とこの種目も盛況であった。

予選でハイレベルであった男子800mは、他の種目とは逆に牽制しあったのか、最後のマイルリレーに余力を残すためか、やや積極性の欠いた決勝であった。記録的にも予選に劣る結果とはなったが、優勝した三武 潤(城西大2)2位田中 言(早稲田実3)など実力者が上位を占めたことで関東大会での巻き返しを期待したい。

男子5000mでは、1500m同様打越 雄允(久我山2)がレースを制した。14分20秒台の自己記録を考えると優勝記録15分00秒23は物足りなさを感じるが、いかなるレース展開にも対応できることを確認できたといえよう。また、昨年の全国駅伝出場校である東京実業が6位までに3人を入賞させたのは見事であった。今年の駅伝での活躍を期待させる内容であった。

男子三段跳でも自己記録を大きく更新した選手が続出した。強い追い風を上手に利用できた者が多かったのだろうが、昨年の新人大会から成長した選手が多かった。14m44で優勝した野木 靖郁(都町田3)は昨年の新人大会では入賞もしておらず、まさにステップアップした。上位4位までが14mを超え、最後の6回目まで逆転劇が繰り広げられたドラマチックかつハイレベルなジャンプは見応えがあった。

男子円盤投では、競技途中から嵐のような風雨であったにもかかわらず2つの大記録が樹立された。まず、東京都高校記録保持者の大山 優汰(東京3)が序盤で46m81の新記録を投げると、5投目に佐藤

光一（都松が谷3）が47m20と逆転の記録更新を成し遂げた。ともにインターハイでの入賞が可能な記録だけに素晴らしい限りである。また、6位入賞者全てが40mを超えるのは全国でも最上位のハイレベルではないだろうか？

男子1600mリレーは土砂降りのなかスタートされた。1走から東京高校がリードし、アンカーのケンブリッジが一度は首位を明け渡したがゴール前抜き返し3分19秒94でゴールした。急な天候の変化にもかかわらず、出場チーム全てが予選より記録を上回るといふ健闘ぶりであった。

女子200mは藤森 安奈（東京2）がただ一人24秒台をマークして優勝した。まだ、本調子ではないようだがレースを重ねるたびに本来の伸びやかな走りになってきた。また、2位には実力者山本 芽衣（日工大駒場3）が25秒09とこちらも本来のスピードに戻りつつあった。特筆すべきは3位の高森 真帆（東京1）で、1年生ながら上級生を抑え2位山本にも迫ったのは収穫であったのではないだろうか？

女子800mは、全国大会優勝候補の鈴木 翔子（白梅学園3）が貫録の優勝をおさめた。まだ本来の走りではないが、前日の予選を2分11秒台で走り、なおかつマイルリレーにも全力で走り切ったこの決勝レースは「抑え気味」となっても仕方ないのだろう。2位には後輩のト部 蘭が入り、白梅学園が1・2位を占めた。

同じく女子3000mでは順天高校が1・2・3位を占めた。優勝は3年生の茂木 美優・2位は2年生の土田 美優・3位は1年生の有園 早優と学年のバランスも良く秋の駅伝に向けて好結果と言えよう。反面、実力がありながら入賞できなかった選手が目立った種目でもあった。

女子100mHは予選から向い風に苦しめられた。予選時は常に2mから4mの向い風でスピードもリズムも上がらずにいた。迎えた決勝も向い風2.2mのなかスタートした。風に負けない力強さで走り抜けた武山 詩歩（東京2）は、自身初となる14秒台をこのコンディションの中14秒82とした。2位にも東京の3年生岩本 香奈が14秒89で入りこの種目の強さを発揮した。また、3位の佐藤 あゆ子（早稲田実2）にも全国出場のチャンスがありそうだが、インターバルのスピードアップが急務であろう。

女子1600リレーは、降り出した大雨の中予想通り東京高校と白梅学園の一騎打ちとなった。1走の400mチャンピオン安西 この実でリードを作った白梅学園が終始リードを守ったが、アンカー勝負となった終盤、東京の3年生 峰 悠花が上級生の意地から白梅学園をゴール前で差し切って先着した。両チームとも全国決勝を狙えるチーム力であることを証明したレースでもあった。

女子七種競技は、走高跳で優勝した1年生の伊藤 明子（田園調布学園）が、ただ一人4200点を超えて優勝した。1年生ながら4種目でトップ記録をマークし万能振りを発揮した。やり投げだけがまだ不慣れであるのはやむを得ないだけに、経験を積むことで「末恐ろしい」記録を打ち立てる可能性が高い逸材である。2位の小谷野 芽衣（都粕江3）も4100点を超え全国大会への可能性を感じた。

総合

男子は東京高校が短距離・ハードル・投擲に6種目で優勝し11年連続27回目の総合優勝を果たした。各種目で複数入賞し大量得点を得られるのが強みであり、ここ数年は南関東大会でも総合優勝している。さらに今年の東京高校はインターハイの総合優勝候補としても挙げられているだけに期待したい。

女子も東京高校が総合優勝をし、昨年の雪辱を果たした。女子も短距離・ハードル・投擲で7種目に優勝し男子同様各種目で複数入賞し加点した。さらに、入賞できなかった種目は800mとやり投げだけであった。東京高校は2年ぶり19回目の総合優勝である。

（2011.5.27 掲示）